◎あらぬ噂

岩代須賀川　服部貞子

女は縹緻よく生るゝが徳、お芳さんをご覽じろ、手桶さぐるも重そうなあの細腕に若旦那をまるめ込み、と言ひも終らぬに傍なる一人、ほんにつまらなさはこちとらなり、僅か二月ばかりの店賃の滞りを、差配のあの禿爺めが矢のやうな催促、同じ店に住み乍ら扶持米送らるゝ人さへあるものを、でも鼻の下の長き若旦那様。米淅ぐ手におのづから力のはいる荒々しさのとばしる水に面そむけてまた一人、でもよいさ／＼を止められたのが大仕合せ、あの地響に棚の徳利がころげ落ちて、二度まで碎いてしまひしと、芳といふ名のふと耳に入りて、柳のかげに我佇めりとも知らぬ人達のさがなき口々。口惜し、何事ぞあゝ其取沙汰は、知らざりき、知らざりき。かゝる誤を傳へらるゝ上からは、最早決してお世話にはならじ、今までとてもお世話うくるが心苦しからざりしにはあらねど、瀕死の母の面影に打ち消されて、お惠うけたるが我あやまり、思へば心弱かりき。いぬる年、醫學士の冠を戴き給ひて、お歸國中の家主の若旦那様が、此度大きやかなる病院を建つるとて、きさらぎの頃より人足ども數多つどふ前なる空地、土固めする頃は、母の病もやう／＼に重りて、日毎々々の地響に顔顰め給ふを見ては、悲しう怨しう、見やらるゝはかの廣場、音頭の唄に和して面白げに張り揚ぐるかけ聲も、身にはたゞ腹立しう、呆然として佇める後に、面白くてかとのたまふ聲、驚きてふりむけば、たちますは若旦那様なり。つるべの繩にたつさはりて、仕事を見給ふお姿を、いつも凛々しと見上げまつるが常なりしが……折から奥に咳入る聲、病む人やあると眉うち顰め給ふに、赤らみし面を落ちたる小櫛拾ふにうつむきて、母がと答へまつれば、それ大事なり、いかなる様か我診て遣はさんと、早やたちつけ惡き戸に手をかけたはふに慌てゝ驅け上りてあたりの塵を拂ひつい出すに座蒲團もなき恥かしさを、つゆみ心にもとめ給はず、やがて腕こまねきて、かゝる容態にてはさぞやかの仕事は騒々しからん、明日よりは暫の間中止さすべしと、事もなげにのたまふに、驚きしといふはおろか、たゞお顔のみ打ち見戍れば、微に笑まれて、我父も今病みてあり、心する足音にさへ不興の聲聞くは度々なるに、かゝる重き病の身にはかの騒々しさは堪へざるべし、病にもまた惡るし。醫の道を修めたる我、わるしと知りてなし得べきや、人を救くるが醫の道にはあらずや。さのみ急ぎのことにもあらねば、あすより暫し中止すべし、且つは父の病む折から、よき功徳にもなるべければと、ひとり心得て立ちあがり給ふお姿を、たゞ伏し拝み伏し拝みたる其明朝より、まこと廣場に人のかげは見えずなりぬ。それよりは足繁く母の病を診たまふのみか、苦しきたつきを早くも知りたまひてや、折々のおつかはせもの、受けざるも心苦しう、冥利がつきて恐ろしと泣く母もろとも、我も涙は絶えざりき。父と兄とにさきだゝれて、世に身寄りとてなき我等母子、せめて臺所の隅

の水仕わざなりとして、一生を萬分一の御恩報じにつくしたく思ふ心は山々なれど、いかにせむあらぬ名をうたはるゝ口惜しさ、かくては若旦那様の御身によもよきことあらじ、やがて奥様たるべき美しき人の此町うちにありとさへ聞くものを、若しも流れ／＼てそなたのお耳にいらば何とせむ、火のなきところに煙りはたゝずなどいふ言の葉の昔より傳り居るなるを。母の病とて今は癒ゆべき見込みもなし。いつまでかかくてあられんものぞ、さらば今宵此地を立退かんか、何處をさして行く身か知らねど……。

いつしか空は曇り來て、手桶の水に細かき波紋を描きぬ。ひくう飛びゆくつばくらめ、事なかばなる敷地をめぐりて、行末はいづく、彼に家あり。

あゝ住むに家なき吾が身をいかにせむ。

【入力者注】原文には傍点等が付されていますが、煩雑を避けるために省略しました。

底本：「女子文壇」明治四十(1907)年第三卷第十一號
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三年三月十三日
リンク：水野仙子ホームページ